



日々雑感 (タイトル決まらず)

9月も終わろうとしています。日中の日差しはまだ厳しく、動物園内をあちこち歩いていると結構汗が吹き出てきます。しかし、日没時間も早くなり日が沈めば急速な秋の気配を感じます。これまでは季節の移ろいを自然環境の変化などで感じてきましたが、動物の変化でも読み取れるということが動物園に来てからわかってきました（というほどわかっていませんが）。たとえば、クジャクは6月頃までの繁殖時期が過ぎれば飾り羽根といわれる上尾筒が抜けること、春から夏にかけてはアメリカバイソンのモフモフした冬毛が抜け落ちること、ホンシュウジカの角が春には落下すること(その前に動物園では角を切り落としますが)、などなどです。こうしたことを考えると繁殖や厳しい野生環境で生き抜くために、その動物の種に一番相応しい体の仕組みが長い時を経てつくられていったのでしょうか。

また、1年というサイクルの中で繁殖時期が限られていること、あるいは生まれてから死ぬまでのライフサイクルの中で繁殖時期が限られていること、またはまったく繁殖時期は特定されないこと、など動物によっても様々な繁殖の形態がありますがこうしたこともその種が繁栄していく上で一番相応しい形態を選択していったのだと思います。そんな中で動物園では以前にも紹介したように平成20年もたくさんの仲間が生まれましたが、ここに来て話題を集めているのがコツメカワウソの赤ちゃんです。何がかわいって、赤ちゃんもそうですがそれをかいがいしく育てる両親の姿、表情がとてかわいいのです。私も仕事柄、というか立場上あまりかわいい、かわいいというのともいかなものか、という感じなのですがおっぱいを飲む2頭の赤ちゃん、それを横になって子ども達に手を添えながら飲ませるお母さん、その光景をほほえましく見守るお父さん（時々このお父さんは赤ちゃんのお尻をなめてあげたりします）、この4頭の幸せな家族が人間の家庭にオーバーラップしてしまうのです。お父さんは、1頭の赤ちゃんを口にくわえて寝室のまわりを1週してまた寝室に戻ってきます。いかにも人間の父親が赤ちゃんを抱いてホイホイ喜びまわってる光景とダブってしまうのです。それをやさしく見守るお母さん。いいですねえ、個人的にも忘れかけた光景です。

動物園では、子育てをしない親の場合はこちらで赤ちゃんを取り上げ人工哺育に切り替えまします。しかし、人工哺育で育った場合でもいずれ大きくなる前にまた親たちのもとへ返さなくてはなりません。そのときが大変です。平成19年はサル山で生まれた二ホンザルの「チッチ」を人工哺育で育て、ふれあい広場の人気者となりました。しかし、子ども達にもチャホヤされあまりに人間になつきすぎてしまいました。このままでは戻れなくなるということで早目にサル山へ戻し、しばらくは元気にはしていたようですが最近ひっそりと亡くなっていました。仲間から攻撃されたということでもなかったようですが、餌の獲得で淘汰されてしまったのかもしれませんが。生まれてからはいつも飼育員から餌を与えられていたのですから。そうした意味で今回のカワウソ夫婦やコビトマングース、ペンギン、カンガルーなどは皆大切にわが子を育ててくれていて動物園としても安心するところです。その子育て風景をみてかわいいと思ってくれるのが一番うれしいことです。そしてかわいい、大きい、怖い、臭い、といった素直な感情を表せる場、それが動物園なのではないでしょうか。

平成20年9月28日 園長 生江信孝



コビトマングース・ファミリー
(平成20年5月25日2頭繁殖)



コツメカワウソ・ファミリー
(平成20年8月30日2頭繁殖)

2008年9月28日

過去の一覧

[令和6年](#)

[令和5年](#)

[令和4年](#)

[令和3年](#)

[令和2年](#)

[令和元年](#)

[平成30年](#)

[平成29年](#)

[平成28年](#)

[平成27年](#)